

戦時中の思い出

伊佐 二久 陸士55

大東亜戦争が終わったのは昭和20年(1945)8月15日であるが、戦時中のことについて覚えている人も卒寿を超えて亡くなられた人も多い。

そこで、若い人たち、特に自衛隊の方々の参考に、戦時中の思い出話を紹介することにした。

私は昭和16年に陸軍士官学校を卒業し、終戦時は陸軍大尉であったが、アッツ島玉砕時の動員や北千島防衛、東京など大都市の空襲、原爆直後の広島など戦争の悲惨さを体験してきた。戦争を知らない方々のお役に立てば幸いである。

(1) ハチマキ状の禿

昭和18年アリュージャン列島のアッツ島で山崎部隊が玉砕したが、この援助で動員がかかり、明日小樽港から出発するという時、中止になりその時は残念だったが、行っていたら間違ひなく米軍潜水艦の魚雷で海の藻屑になっていただろう。その頃私の機関銃中隊に年配の兵士が招集されてきた。

会ってみると頭の毛がハチマキ状に丸く禿げている。

「どうしたのか?」と聞いてみたら、「支那事変で戦闘中真正面に敵の銃弾を受けた。普通なら頭部貫通銃創で即死するところだが、弾丸が弱っていたせいかな、皮膚と頭蓋骨の間をくぐりぬけ、ぐるりと回って元の穴から出て行った」とのこと。運の良さに驚いたものである。

銃弾は銃身で螺旋形の溝を通るため、回転しながら飛んでいく方向が維持されている。しかし距離が長くなると弱くなると、草一本でも進路が変わってしまう。

この場合は頭蓋骨に妨げられて脳内には入らなかったと思われる。その兵隊さんには「貴方には神様がつかっているよ、これからも頑張りなさい」と励ましたものであった。

(2) 飛んでいる弾丸が見える

軍隊では時々実弾射撃の訓練をしていた。私は射手の後ろに立って双眼鏡で弾道を観察していた。弾丸はおおむね放物線を描いて飛んでいくが、最高点のところを双眼鏡で観察されていた。そこでそのわずかの点数、7点とか8点だと教えていたが、その後に的の真下の塹壕で観察している兵士から「**点」と標示があり、これと同じだと「どうして分かったのですか?」と感心されたものであった。

自衛隊でも実弾射撃の訓練をされる

ことがあると思うのでテストしてみられたらいかがでしょうか。

(3) 銃弾の音

昔の軍隊は弾丸の中をくぐりぬけることが多かったもので、どんな時が危険か、安全かが分かっていた。弾丸の音がヒューンという時は遠くを飛んでいるので安全だが、パチッという鋭い音の時は身近なので危険だから安全地帯に隠れた方が安全と教えていた。

(4) 日本一歩いた軍隊

これは私の同期生、故中山政孝君の体験談で、37師団、歩兵225聯隊の中隊長で、昭和19年4月大陸縦断作戦に参加していた。

彼は中国大陸を徒歩で4600km、鉄道、船舶で5800km、合計1万400kmを4作戦で戦いながら、最後はタイ国バンコクまで移動している。

第1段・京漢作戦

4月23日官大を攻撃、中山は先頭に立ち軍刀を振りかざして高い岩壁を乗り越えて突入し占領した。その後許昌を攻撃、幅60m、深さ2・5mの水濠を禰一本の裸で飛び込んで占領、全員無事であった。5月1日西へ180km行軍、17日190km歩いて南下した。

第2段・湘桂作戦

この頃制空権は支那の米空軍にあっただため移動はすべて夜間行軍であった。初めは武昌、長安間184kmを鉄

道輸送、その後行軍で760km歩いて宝慶に到着、9月25日奈湖山の敵を攻撃したが失敗、5名が戦死した。

その2日後主陣地を攻撃、10月中山は砲弾で左足を負傷、破片は戦後も残っていた。11月桂林を攻撃し占領した。その後数都市を経由して国境の南関に到着し、昭和20年1月この作戦は終了した。

第3段・明号作戦

明号作戦は、1945年3月、フランス領インドシナ(仏印)において日本軍が実行した作戦で、これによりインドシナ半島を完全支配下に収めた。この作戦で37師団は、トンキン東部を担当した。

第4段・南進

タイ国に進出、6月ベトナムを南下、サイゴンを経て8月10日バンコク着15日終戦。中隊の戦死17名、負傷者を含め46名、聯隊では昭和14年以来2045名が戦死している。

以上を見ると、4600kmを戦いつつ行軍しており、その苦労は言語に絶するものであったと思われる。これが米軍だったらすべて車で輸送していたであろうが。

(5) 米軍B29に体当たりした戦闘機

昭和20年には日本の大都市が空襲で焦土となり数10万の市民が焼け死んでいた。

私は19年北千島守備から予科士官学校の区隊長を命ぜられて東京に移住、大空襲を目のあたりにしていた。

ある時、士官学校が空襲され、多数のB29が襲来、日本の戦闘機が迎撃したがその効果がなく、このため、その戦闘機は墜落させるために体当たりをしたのである。

戦闘機は勿論墜落し、パイロットは戦死したが、B29は煙を吐きながら飛び続けた。その爆撃機は後で不時着したと聞いたが、米軍機の強靱さに驚いたものである。

(6) 風船爆弾

米空軍の爆撃機B29は航続力が大で、数百機が東京、大阪、神戸など大都市を空襲し、当時木造家屋であった町は忽ち焼野原になっていた。日本の爆撃機は航続力が短いため、米本土の空襲は不可能であったため風船爆弾が考案された。

地球の成層圏には西から東に向かって流れがあり、これを利用すれば風船爆弾を米本土まで運ぶことも可能と考えられたのである。

何発の風船が使われたか知らないが、多くは太平洋に落下して米本土迄は届かなかったと思っている。

しかし1〜2発は米大陸に届いたらしく、山地に落ちて山火事を起こしたらしい。都市には届かなかったが

えつて幸いであつた。もしも住民に被害があつたら、日本の都市空襲は棚に上げて、発射した人を戦争犯罪で訴えたかもしれない。

風船爆弾のことは皆さんあまりご存じないと思ひ、紹介した。

(7) 北千島の思い出

アツ島玉砕の時、救援のため動員下令で明日小樽港から出発の直前、中止命令が下り残念があつたことは前述した。その後しばらく北海道帯広で待機していたが、ソビエト軍の侵略が予想されたため、北千島守備を命ぜられ幌筵島、占守島の守備にあつた。

1 気候・当時の旭川は零下35度と寒かつた。北千島は零下20度くらいでたいしたことはなかつたが、風速が物凄く嵐の時は秒速50メートルに達し、はいつくばつて進むうとしても吹雪の時は前に進めない状態で、天幕の厚い布までズタズタに裂けてしまふほどの凄さであつた。

崖つぶちで放尿すると下からの風で尿が飛び上がり、顔から胸までびしょ濡れになることもあつた。

2 日本軍は食糧や弾薬を補給する

輜重兵を軽視する傾向があり、このため勝ち戦の中国でさえ飢え死にする兵士がいたもので、補給を重視する米軍とは大差があり、これも敗戦の一因と思つている。

食糧がないため皆で野菜に似た野草を探して食べたところ、それが毒草で全員下痢し苦しんだことがあつた。食糧補給は弾薬以上に大切と痛感したものである。

3 1カ月入浴せず虱増産・北千島

上陸当時は守備が主目的のため、入浴などには関心がなく、全員着替えもしていなかつた。そのうち体が痒いという兵士が出てきて下着を調べてみると虱がわんさと這い回つてのが見つかつた。私もシャツを脱いで調べたら、虱がうじょうじよ這いまわつてゐる。蚤と違い色が白いので見逃していたらしい。

早速下着を洗濯し、ドラム缶にお湯を入れて入浴したら全員痒みから解放された。清潔、入浴の大切さを痛感したことであつた。

4 ヒグマの肉を食べる・北千島には小さな川がありそこを産卵のため鮭が上つてくる。

その鮭を竹槍でつついて捕らえ食べていたが、残つたものは天幕の外に干していた。その肉を狙つてヒグマがとりに来るこゝがあつた。

怖いので兵士らは逃げ出すところだが、その日はアイヌの兵士が歩哨に立つていたので度胸があり、小銃でヒグマを射殺したという。おかげで、皆でヒグマのステーキを

賞味することが出来た。ヒグマの毛皮は聯隊本部迄持つて行つて差し上げたものである。

5 アザラシの肉を食べる・海岸に行くは無数のアザラシが集まつてゐる。内地なら処罰されるころだが、ここは戦場だから許されるだろうと勝手な解釈をして海岸の岩かげに隠れて

機関銃を兵士が構えていた。

ある程度集まつたところで発射、多くのアザラシは海に飛び込んで逃げたが、数頭の死体を持ち帰り、夕食は皆でアザラシのステーキを賞味したことがあつた。平和な時代だったら法律違反で処罰されるのではないかと反省している。

6 ハラキリの話・ソビエト軍との戦闘が一段落し、私の同期生、故長島厚君が停戦協定の書類を持ってソ連軍本部に赴いた。彼は死を覚悟して一人で行こうとしたが、部下がどうしてもついていくと言うので2名の兵士と3人で出かけた。白旗を掲げていたのに銃撃を受けたが幸い無傷であつた。

本部について書類を提示したが、相手は「印鑑だけでサインがないから受け取れない」と拒否した。長島は怒つて「受け取らないならここでハラキリする」と怒鳴つたら、相手も受け取つてくれた。後の司令官同士の協定の時、長島君も同席したが、ソ連の司令官が

「ハラキリ君のおかげで停戦する」と褒めてくれたとのこと。ハラキリという言葉を知っていたのは幸いであった。長島君は停戦後シベリアに3年間留置されたが、帰国後お会いしてご苦勞を慰めたことがあった。

(8) キスカ島救援作戦

戦時中、旭川の歩兵第26聯隊にいたころ穂積部隊がアリューシャン列島のアツツ島を占領していたが、キスカ島に転進を命ぜられ、その後を山崎部隊が引き受け米軍攻撃で玉碎し、私たちの救援中止になったことは前述した。

穂積部隊はおかげで助かったが、近いう将来キスカも攻撃されるとの判断で海軍に救助の依頼をした。艦長は駆逐艦に乗りキスカに向かったが、その日は晴天で遠方まではつきり見える状態だったので、艦長はこれでは敵に発見されて危険だと判断、救助を中止した。このことが卑怯者と非難されたが、むしろ良かったと思っている。その後ひどい濃霧で何も見えない日があったが、艦長はこれとばかりに決意し、スタートした。米海軍もまさかこんなひどい濃霧の時には来ないと思ったか、全く出航せず待機していたという。このため米海軍の攻撃を全く受けることなく、キスカ島に到着、小銃、機関銃など兵器もすべて海中に投げ全員無事に北千島に上陸することが出来た。

同期生の故熊谷稜太郎君とも元気で会うことが出来て嬉しかったのを覚えている。米軍はこのことを全く知らなかったようで、後で艦砲射撃を加えた後上陸し、中には米兵を日本兵と勘違いして射殺したこともあったらしい。

今思えばアツツ、キスカと2島を占領し生きて帰れたのは幸いであった。山崎部隊の方々には謹んでご冥福をお祈りしたい。

(9) ズボンに銃弾2発、大事なところ無事

これはノモンハンの話であるが、私の先輩が同じ歩兵26聯隊の中隊長であったが、猛烈な敵弾射撃の中を匍匐前進（腹ばいで前進）していたが、突撃の合図で立ち上がろうとした瞬間、敵の銃弾2発がズボンを貫いたらしい。その時は気が付かなかったが、戦い終わってズボンを調べたら、男の一物の両側に二つの穴が開いている。考えると2発の銃弾は男根の左右を通り抜けたらしい。

万一僅かでも右か左にずれていたら大事なところは打ち飛ばされ大出血で死亡したであろう。近くの股動脈も無事でよかったと思っている。戦争は全く運次第と思っている。

(10) ハングガイの思い出

予科士官学校卒業の時、兵科と所属部隊を決められるが、私は、兵科は航

空兵、任地は蒙古を希望したが、結果は歩兵、部隊は旭川の歩兵第26聯隊、その時はがっかりしたものである。しかし航空兵になつていたら特攻を志願して戦死しただろうし、航空兵になつた同期生はほとんど戦死している。

聯隊本部は満洲のチチハルにあり、満洲鉄道で朝鮮経由、一日かかって到着した。寝台車にも乗らず座席で眠りながら一夜を明かしていた。

聯隊本部に行き聯隊長の宮崎周一大佐に私が代表でご挨拶した。宮崎聯隊長は優秀な方で、後で大本営参謀として、終戦時米軍との停戦協定の時も重光大使とともに出席しておられる。

聯隊長から「まず軍旗を拝せよ」と言われ、一同軍旗に拝礼したことを覚えていた。

部隊はソ満国境のハンダガイにいたため、翌日無蓋のトラックに乗って長距離を移動した。当地はハルハ河畔にあり、対岸の崖下にソ連兵の姿が見えていた。

そこには兵舎もなく私たち士官候補生は洞穴の洞窟に寝泊まりしていた。暖房のストーブもなく、室内でも水が凍り、トイレもないため野外で排便していた。

冬は零下50度になり、排尿するととたんに凍り付き、男根や鼻、耳、指などが凍傷になる人も多かった。北海道

よりも寒く防寒帽やマスクが必要であった。

雪が積もると反射光で網膜炎になるので色眼鏡も必需品であった。夜には狼の遠吠えが聞こえていた。

『偕行』編集委員の佐藤正様の岳父水戸徳重様も同じ聯隊で、お会いしていたかもしれないと思っている。

時にはソビエトから国境を越えて満洲に逃げ出す人もあったようである。数カ月の訓練を終えて帰国し士官学校本科に入學したがハンダガイの生活は一生忘れられない思い出である。

(11) 日本都市の大空襲、広島、長崎の原子爆弾

私は昭和19年陸軍予科士官学校の区隊長を命ぜられ、北千島から東京に赴任した。

北千島で終戦を迎えていたら戦死かシベリア抑留を免れなかったと思っている。しかし東京、大阪、神戸などの大空襲や広島原爆の被害を見て、その大きさを体験した。

米軍B29が数百機来襲し無数の焼夷弾を投下、木造の日本家は忽ち燃えさかり、次々に焼野原になつていった。日本の戦闘機も攻撃していたが前述したようにあまり効果はなかったようである。東京のほとんどが焦土となり、その後大阪、神戸など大都市が次々に空襲され数百万の市民が犠牲になつて

いる。その後広島、長崎が原子爆弾で攻撃されている。

私は終戦直後に広島を訪れたが、1発の原爆で町全部がぶれており煙突しか残っていないのを見て、その凄まじさに驚いたものである。

ルーズベルトは「原爆を使うまで日本を降伏させるな」と言ったそうだが、非戦闘員の一般市民を何百万も殺害しており、ソビエトが60万人もシベリアに抑留したのと同じく、明らかに戦争犯罪と言わなければならない。

(12) 満洲国について

戦争前の日本は朝鮮、台湾、南樺太、千島列島、太平洋委任統治地などが領土であったが、それでも「人口増加にあわない」という意見で、五族協和の満洲国が石原莞爾らの作戦で独立し、私たちも賛成していた。

日本の貧しい農家の次男、三男は仕事もなく、広い満洲で大地主になれると喜んで移住したと聞いていた。

しかし満洲に行ってみると五族協和は名ばかりで、関東軍や日本の官僚が実権を握っており、皇帝の溥儀も無力で不満を抱いていたらしい。

私も広島陸軍幼年学校1年の夏休みに、北満のチャムスで陸軍病院長をして

いた父を訪ねたことがあったが、河で外輪船に乗った時、中年の満人船長より20代の若い日本人事務長の方が威張りく

さっているのを見て驚いたものである。

途中ハルビンで一泊したが、この町は近代的で美しく、外国に行ったような感じであった。ハルビン駅で汽車を待つていたら、白系ロシア人少女の花売り娘が軍服姿の私を見てニッコリ微笑んでくれ、私も微笑み返したことを思い出している。私の初恋？(笑)

その頃満洲には匪賊が多く、市民や店を襲っていた。チャムスに行く途中船に乗ったが、軍服姿を信用したのか、まだ子供の私に中年の日本人が「匪賊が出たら大丈夫でしょうか」と心配そうに尋ねたことがあった。

私は武器も持っていないのに「大丈夫です、私が守ってあげます」と偉そうに答えたが、それで安心したのかその人は船室で眠っていた。

チャムスである満人女性が難産で苦しんでいたが近くに医者もおらず、困っていた。そこで父が陸軍病院に搬送させ、帝王切開して無事出産した。勿論無料である。

これに感激して、父が帰国する時はチャムスの村長さんたち大勢がお見送りしてくれたという。陸軍病院に満洲人女性を入院させるなど、上司から叱られるしなやかと心配したが不明である。

今次大戦の敗戦で日本はすべてを失い本土だけの狭い国になったが、かえって経済大国として発展したのを見

て、日本人は優秀だと思っている。

国家は多民族よりも単民族の方が、差別がなく発展すると思っ直している。今の中国上海には日本人も多く、この人たちのために診療所を作りたいという昭和病院院長に同意して、10回ほど上海に行き、国立病院と交渉したことがあった。費用も日本側が6割、中国側が4割でまともつつあった。「国立だから費用が出るか？」と尋ねたら「薬剤部があるから大丈夫」とのことと交渉を進めていた。

ある国立病院を訪問した時トイレに行ったら、国立なのにトイレが有料と書いてあり驚いたことがあった。

診療所のこと、交渉がまとまって明日調印という時、突然院長が交代し、理由を尋ねたら「薬剤部は赤字だ」と全く逆の回答に驚いたものである。

このため計画は中止になったが、「これでも共産国家か」と思うことがいくつもあったのを記憶している。

上海の町も中心部は高層建築が林立して東京と同じだが、郊外に行くとき口家はかりで電気、水道もなく、ごみも家の前に捨てられていたのを見て、貧富の差が大きいと感じたことがあった。

(13) 手榴弾のこと

昔は接近戦が多く、手榴弾は、塹壕やトーチカ内の敵に、窓口から投げ入れるなどに使われていた。

私が士官学校区隊長の時、生徒たちの訓練に手榴弾の実弾で訓練したことがあった。信管を抜くと数十秒後に爆発するので、あまり早く投げると投げ返される危険がある。このため暫く手に持つてから投げた。

ある生徒は不器用で持つていた手榴弾を落としてしまった。爆発したら大変なので、私は皆に「伏せろ」と命令し、すばやくその手榴弾を拾って投げたことがあった。幸い投げた後に爆発したが、手に持つていたら爆発で死亡したであろう。終戦後自決のために手榴弾や拳銃を持ち帰る人もいた時代である。

以上戦時中の思い出を紹介させていただいた。参考になれば幸いである。

広告目次

(株) セレモア……………表紙3
(株) 東京都民互助会……………表紙3
ローレルバンクマシ(株)……………表紙4
(株) 全国儀式サービス……………24
(株) 武蔵富装……………59
信和株式会社……………59

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。